



あね忍♥

お姉ちゃんはくノ一なんだぞ！

森野一角

illustration © 音音

美少女文庫
FRANCE & SHOIN



お家騒動？とワガママ姉ちゃん

「ねえ、タカちゃん。あたしのご馳走はどこに行っちゃったのよう」

「あがあっ!？」

正座して痺れていた右足を突かれ、尾張孝明はみつともない悲鳴をあげた。

「な、なにするんだよ、ヒサねえ! おわりひさめ ちょ、や、やめっ!」

振り向いた先にいた姉の尾張氷雨は、加害者にもかかわらず、まるで自分がイジメにあったような顔を孝明に向ける。だがその間も彼女は教師らしく(?)黒板を指すために使う指示棒で孝明の足を突きつつづけていた。

孝明の足を突くたび、腰まである髪を束ねたポニーテールが揺れ、九十センチの豊かな胸が窮屈そうに形を変える。そしてタイトスカートからのぞく黒いストッキングをまとった脚も、不満げに細かく動いていた。

「あたし、徳川本家とくがわの会合に呼ばれたの、はじめてなんだよ？　なのに、こんな針のむしろに座らされて、さらに夕食もお預けつてのはどういふことなのよ！」

氷雨は子供のように、じたばたと暴れだした。

切れ長の眉は吊りあがり、人を吸いこむような黒い瞳は不満くもそうに曇つて見える。

多くの男を惹ひきつける唇もへの字に曲がり、元来の蠱惑こわくさは微塵みじんも感じられなかった。
(あゝあ、せっかくの美人が台無しだよ)

孝明はため息をついた。氷雨は、孝明と同じ両親から生まれたことが信じられない、というよりも自分の姉ということが信じられないほどの美人だ。だが、その美人という言葉の前には、必ず前置きがつく。しゃべらなければ美人、動かなければ美人、眠っていれば美人。そして猫をかぶっているときは美人……。

「だからって、それはよせつてば！」

孝明は仕返しとばかりに、姉の膝を指で弾く。氷雨は痺れた脚から駆けあがつてくる波を堪えるように、齒を食いしばった。

「ぐ……っ。な、なにするのよタカちゃん。このヒトデナシ！」

「おとなしくしてくれって。分家の人たちが見てるだろ」

「そんなの関係ないッ！　あとで覚えてなさいよ。食べ物の恨みは恐ろしいんだから」
美しい顔を子供のように崩し、氷雨はぶいっと横を向く。彼女の背後にいた多くの

大人たちは、その動作の一つ一つをじっと観察していた。

(……話には聞いていたけど、本当にこんな世界だったんだな)

氷雨の背後、やや距離を置いたところに座っていた人間の多くが、上座の正面に四人だけ座っている孝明たちをにらんでいた。孝明は自分が徳川一族御三家の一家である尾張家の跡取りであり、一族の主権争いの当事者であるということは何度も聞いていた。だが公式の場で分家の人間と会うのは初めての体験だった。

「孝明、どこを見ているの」

「それは分家……ぐあっ!!」

今度は左足を扇子で強く叩かれ、頭のなかでチカチカと星が散った。

「しっかりと前を向きなさい。尾張家の当主代理だということを忘れないで」

伸ばされた腕を包むブレザーの女子制服と袖に走る三本の金色ラインだけで、孝明は相手が誰かわかる。自分の通う学園で最優秀生徒に三度も選ばれている人間は一人しかない。

だが孝明が彼女を知っているのは、いつも一緒にいるからだった。

孝明に痛恨の一撃を加えたのは、隣に座っていた水戸家当主の水戸絵美莉^{みと えみり}だった。

「ぐは……っ。絵美莉、もう少し手加減してくれよ」

「バカ言わないで。私は愚者に手加減などしないわよ。容赦^{ようしや}なく叩きつぶすだけ。あ

なたを見捨てず忠告してあげているだけ、ありがたいと思いなさい」

彼女は繊細なプラチナの前髪を指で払い、青く透き通った瞳で孝明をにらみつける。呆れている姿すら神々しく、その表情をさせたのが自分であるということが自慢になるような気になる。それほど、生きる世界が違っていた。

(……ううっ。その顔、反則だよ)

隔世遺伝という奇跡が生み出した白銀の髪と白磁のような透き通る肌は、何度見てもこの世のものとは思えない。絵美莉は、カットされた宝石のような鋭角の美しさを持った美少女だった。

「ちよっと。ちゃんと聞いているの?」

「悪い。素直に見とれてた」

「……えっ!」

絵美莉は目を大きく見開き、その白い顔を一気に真っ赤に染めた。

「ふ、ふざけないで!」

次の瞬間、絵美莉の渾身の一撃が孝明の足に叩きこまれた。

「ぐあっ!? し、しまっ……たっ」

脳天を突き抜けるような激痛に、孝明はバクバクと口を開閉させる。孝明は裏のなに称賛に慣れていない彼女の急所を直撃してしまった自分を恨んだ。

「やーいやーい、絵美莉ちゃんに怒られてやんの」

氷雨が追撃するように、絵美莉が叩いた足を指示棒でつつこうと構える。だが、その氷雨の指示棒を絵美莉が軽く叩いてとめた。

「氷雨さんも自重なさい。姉の恥は弟の恥よ」

「……はーい。あーあ、ヤブヘビい」

絵美莉の鋭い言葉に氷雨は肩をすくめ、指示棒を脇に置く。その様子を、絵美莉の後ろに控えた小柄な少女が心配そうに見ていた。

袖のライン以外同じブレザーを着ているのに、彼女は絵美莉と同じ高校生には見えない。クセのあるショートヘアに大きな目と、制服の上から見ても凹凸おうちつの小ささがわかる肢体のせいで、中学生のようにも見える。だが赤井火澄あかい かすみは、六年間ずっと同じ教室で勉強してきた孝明と絵美莉のクラスメイトだった。

従者としていつも絵美莉につき従う態度や、まるで動物の耳のように側面でピンと跳ねている髪を揺ゆ揺ゆして、彼女を犬呼ばわりする人間もいる。だが孝明は、彼女の元気さや元気さ、それにいつも精いっぱいなところが好きだった。

そして、氷雨や絵美莉といつも一緒にいるため目立たないが、その顔立ちがとても可愛いことも、もちろん気に入っていた。

「大丈夫でございますか、孝明様？」

「だ、大丈夫だよ火澄ちゃん。だからお約束だけは、お約束だ……ぎっ！」

孝明の制止は間に合わず、火澄は孝明の足を一生懸命さすっていた。

「あつ。痛かったのですか!? も、申しわけないのです……」

「い、いや。痛くないから」

孝明は必死に、涙ぐんだ顔で火澄に笑いかける。予想通り火澄は落ちこみ、耳のよ
うな側髪をぺたんと伏せていた。

「火澄、場所をわきまえなさい。あなたが孝明の面倒を見てどうするの」

「す、すみませんお嬢様。……学園でのクセが」

「学園でのことは忘れなさい。ここは本家で、あなたは水戸家に仕える人間なのよ」

絵美莉は振り向きもせず言い放った。

「つまり、あなたにとつても、孝明は倒すべき敵なの。ここではね」

絵美莉は一瞬だけ孝明に鋭い視線を向けた。彼女は孝明にとつて、いや尾張家にとつて最大の敵だった。徳川一族を率いる徳川玄蔵は、自分の内縁の妻三人の一族を御三家と呼び、後継者を育てる意味で御三家同士の切磋琢磨を命じていたからだ。

(どう考えても、絵美莉の一人勝ちだと思っただけだなあ。でもそれじゃ、大人の皆さんが納得できないわけだよな)

孝明は親が御三家の尾張家当主というだけの平凡な高校生。残る一家こと紀州家は

きしゅう

早期に没落し、今は見る影もない。かたや水戸絵美莉は才色兼備の誉れも高く、すでに実力で水戸家を掌握している。客観的に見れば跡継ぎは絵美莉が適任で、競い合うべき孝明もそう思っている。だが、家臣団のように両家に従う下流分家たちは、それでは納得しなかった。彼らは主家を盛りたてるためにいろいろな手でライバルを攻撃し、その過程で生まれた両家の溝は深くなる一方だったのだ。

そして紀州家の再興を図る勢力もあり、彼らの攻撃も激しいものがあつた。

（まあ、徳川一族的には、学園での僕たちがおかしいんだろうなあ）

中高大と一貫教育を誇る学園で六年間近く、孝明は絵美莉たちといつも一緒にいる。そして長期休みにはよく四人一緒に旅行する。今年の夏も海水浴に出かけたし、地元の秋祭りに一緒に参加する約束もしている。だがそれを互いの分家が不満に思っていることを、孝明はもちろん認識していた。

御三家のうち紀州家が早期に没落したため、尾張家と水戸家は本来正面からぶつかってもおかしくない状況にある。そして、家同士の争いに巻きこまれ、孝明と絵美莉も幼少の頃から多くのいやがらせを受けてきている。分家たちにとって、そんな二人が仲良くしていることなど、とうてい納得できないことだった。

孝明は不満げな大人たちに向けていた視線を正面に戻した。

（だけど、当主代理の僕やヒサねえはともかく、絵美莉の使用人でしかない火澄ちゃ

んが一緒にいるのはどうしてだろう。よっぽどすごい自慢話でもあるのかな」

孝明にとって、徳川玄蔵は自慢話が好きなおじいちゃんだった。こういった公式の場では初めてだが、家に遊びに来る祖父とはよく会っていた。いたずら好きなうえに思いつきで行動するところは苦手だったが、それを含めても孝明はおじいちゃん子だった。

（それとも、分家にせっつかれて、僕たち四人に対してなにか言うつもりとか？）
孝明は首をひねる。だがいくら考えても、この四人を揃って呼んだ理由は思いつかなかった。

「タカちゃん。考えたって仕方ないでしょ。聞けばわかるんだから、待ちなつて」

「氷雨さんの言う通りよ。邪推は判断力を曇^{くも}らせるだけ。無駄ではなく害悪よ」

「あ、ああ。そうだな」

孝明は氷雨と絵美莉の声に従い、視線を前方に向けた。

まるで孝明の行動を見透かしたかのようにゆっくりとふすまが開き、一人の老人と三人の老婆が入ってきた。

老人は祖父の徳川玄蔵。三人の老婆は御三家の祖母たち。孝明の祖母もいるし、絵美莉の祖母もいる。没落した紀州の祖母もいる。御三家の藩と同じ名字を持つ祖母たちは誰一人祖父と籍を入れていないが、彼女たちは全員平等に祖父の妻だった。

「ワシが徳川一族頭領、徳川玄藏である！」

祖父はどこかで聞いたことがある前口上を述べたあと、仰々しく大広間を見まわし、最後に孝明たちに視線を向けた。

「今日は重大な決定事項を、皆に伝えることにした。ワシの遺産についてじゃ」

一瞬で、大広間中がざわめきに包まれた。

「よく聞くがよい。ワシは財産を生前贈与することにした」

祖父は、ゆっくりと話しはじめた。

――。

その話は孝明の耳を通り抜けた。

あまりの内容に、孝明はしばらく呼吸することさえ忘れていた。

「あ、あの。じいちゃん、もう一度言ってもらえる……？」

背中に大広間中の視線を感じながら、なんとかそう絞りだす。孝明の耳には、自分の声が初めて聞くもののように響いていた。

「なんじゃ、きちんと聞いておらんかったのか？」

孝明の言葉に、祖父はわざとらしくため息をついた。

「しかたないのう。もう一度だけ言ってやろう。ワシは財産を生前贈与することにした。で、総額のうち、七割五分を尾張孝明……つまりお前に譲る」

その言葉に、さっきと同じように大広間中がざわめいた。

それは事実上、孝明を徳川家の跡継ぎにすると宣言したようなものだった。

(……うう、このパターンは想定していなかったっ！)

まさか、尾張家の当主である父親が海外出張で不在のときにこんな重大な発表があるなど、孝明は想像もしていなかった。それにより、孝明は徳川家を継ぐのは絵美莉だと確信していたのだ。

「七割五分なんて、意味がわからないよ……」

「七割五分というのは七五%のことじゃ。お前の成績でもわかるはずじゃが？」

「……いや、さすがにそれはわかるって。じいちゃん、こんなときに学園関係者に戻らなくていいってば」

玄蔵は孝明の通う徳川英臨学園とくがわえいりんがくえんのオーナー兼理事長でもあった。

「わかっておるならよい。だがもちろん、タダでやるほどワシもお人好しではない。

その条件を言っておいてやろう」

ニヤリと笑うと、玄蔵は立派なヒゲを指で引つ張った。

「相続の条件はただ一つ。伴侶はんりよとなる女性を早急に見つけることじゃ！ ワシは早くお前の子供が見たいんじゃない」

祖父のあまりにもストレートな要求に、孝明は顎がはずれそうになった。